

<京都府南丹市>

【統合による魅力ある学校づくりの取組モデル】

○熟議をベースにした地域との連携・協働による教育活動の構築例

1. 市町村の概要

◆人口：31,804人（平成30年10月現在）

◆小学校：7校，児童数1,455人 ◆中学校：5校，生徒数694人

※学校数，児童生徒数は平成30年5月1日現在

◆市町村全体の学校の再編・存続の状況

平成27年3月に10小学校を閉校し，同年4月に4校を開校。平成28年3月に5小学校を閉校し，同年4月に1校を開校。この2年間で小学校17校を7校に再編成。

平成27年4月に児童自立支援施設内公立中学校を開校し，現在5中学校となっている。

2. 研究タイトルと研究課題

◆研究タイトル

・ふるさと「美山」の学びを通じた児童の確かな学力形成と地域の活性化に関する研究

◆研究課題

・広大となる校区において，美山地域全体の豊かな教育資源を最大限に生かし，校区全体を学習キャンパスとした学習活動を展開するための新たな教育内容づくりや教材開発。

・地域の文化・自然・歴史・産業・人材等の特色を生かし，地域とともに児童の学びを深める教育課程の開発，実施。

3. 調査研究対象校の状況

◆調査研究対象校

南丹市立美山小学校（7学級，134人）

◆調査研究対象校を再編することとした背景・理由

平成18年の南丹市合併後の人口推移を見たとき，近い将来急速な少子化が予測された。そこで，市の教育全体を視野に入れた『南丹市教育の在り方懇話会』等で検討を重ね，小規模校を大切にしたい学びと育ちを促す学校教育環境整備として市全域の大規模再編成（17小学校⇒7小学校）を行うこととなった。

◆再編に至るまでの過程

- ・平成23年 南丹市教育の在り方懇話会等立ち上げ
- ・平成24年 教育環境整備等検討委員会から答申基本計画を議決
- ・平成25年 各PTA，住民説明会の開催 校歌・校章検討開始
- ・平成27年 10校閉校，4校開校

◆再編による学校の教育環境の変化の状況

（調査研究対象校について）

- ・5校⇒1校になったことによる1クラスの人数の増加（12～33名）
- ・児童の通学状況の変化（スクールバス4路線）
- ・校区の広域化（340.47km²：南丹市の面積の半分強）

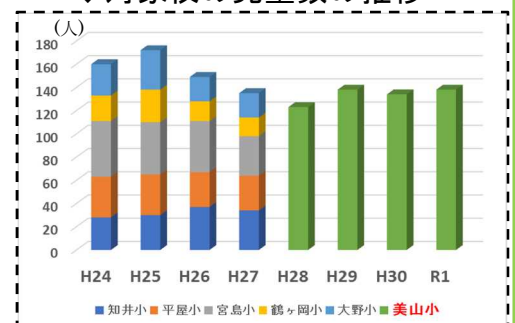
◆調査研究対象校の位置



○南丹市美山町

美山町地区については，5つの小学校を閉校し，1つの小学校を開校した。（白字は閉校した小学校）

◆対象校の児童数の推移



4. 本調査研究において取り組んだ内容

これからの社会を担う確かな学力・生きる力を育むために、小学校再編により広大となった校区の教育資源を最大限生かした「美山学」を、小中9年間を見通した教科横断的な学習内容・カリキュラムとして整備し、指導案・教材の蓄積を行った。同時に、コミュニティ・スクールの導入を見据えた新たな学校づくりを、美山まちづくり委員や閉校した各地域関係者、学識経験者や教育委員会事務局職員から構成した研究推進委員会を中心に研究を進めた。地域との協働により「美山学」の充実を図ることで、地域の歴史や伝統・文化等を、児童と地域住民が共に学び合うことを通して、教育文化活動の継承と推進を図り、ふるさと美山に対する愛着を深め、地域の活性化や発展に寄与しようとする意欲を高めている。

①美山学の構築

「美山学＝地域との連携・協働による教育活動」と位置づけ、次の視点でカリキュラム・マネジメントを行った。

- ・地域の教育資源「人・もの・自然・文化・歴史」を取り入れる
- ・全ての教科・領域を対象とする
- ・地域への働きかけを行う(相互利益の関係を大切にする)

◆具体事例

- ・第5学年町内ホームステイ(自分が住む旧小学校区外地域住民宅での一泊二日の体験学習)
- ・閉校後の旧小学校舎を会場としたサテライト教室(各地域の講師を招き、地域住民も一緒に学ぶ)
- ・島根県隠岐の島海士町小学校5・6年生とのweb交流を通じた地域の見つめなおし
- ・防災無線を使った児童による学校教育活動の広報

②熟議による社会総がかりでの教育気運の醸成

右図のように、従来の学校と地域との関係を今後目指す関係へとシフトさせるために熟議の企画・運営を重ねている。



◆熟議のテーマ

「美山の子供たちにどう育ててほしいか」、「子供の良さをとらえて地域と学校で一緒に取り組めることを考える」、「さらに伸ばしたい力をつけるために具体的な方策を考える」、「子供に学ばせたい美山のことを考える」、「美山の子供たちにどんな社会人になってほしいか」、等

5. 研究の成果と今後の取組

- ・「美山学」を通じた児童の地域への関心と愛着の高まりが児童アンケートの地域への誇りや関心の項目で100%に近づく大きな伸びを示した。また、関わった多くの地域住民が充実感や、やりがいを感じている。
- ・熟議には、美山まちづくり委員、学校運営協議会委員、行政関係者、大学生、小・中学校の保護者・教職員等、延べ300名を超える参加者を得て、幼児から高校生も含め美山で育つ子供への願いや、その実現に向けて大人にできることを、一緒に考えようとする当事者意識が高まり、さらなる取組へ発展しつつある。
- ・地域学校協働活動の活性化による「美山学」の充実と、学校を核にして熟議をツールに子育てを軸としたまちづくりを、地域・保護者・学校の協働で持続・発展させていく。

6. 学校の統合に課題を抱える自治体へのメッセージ

少子高齢化など多くの共通した課題を解決するには、次代を担う子供をどう育むのかを軸に据えて、大人が今できることを考え、協働・実践していかないと手遅れになると考えます。関係する様々な立場の者が目指すところを共有し、それに向けそれぞれができることを進めていきたいと考えています。